

教育行政学から考える

英語教師の
ワークライフバランス

第2回

資源としての時間を意識し
有効活用する

青木栄一

Aoki Eiichi
(東北大学准教授)

時間割主義を見直す

2017年3月公示の学習指導要領の実施に伴う授業負担に頭を悩ませている小学校教師が多いようである。英語の授業が週に1〜2コマ上乘せされるから、授業負担や準備が大変と思うのだろう。

教育委員会レベルでいえば、授業時数確保のために、まず2学期制が試みられ、それが一段落した後は夏休みや冬休みの短縮が行われた。今回の英語の授業増にも対応済みの自治体もあるだろう。ただし、教育委員会レベルでの対応とは別に、学校レベルの対策が求められる場合もある。今回はそうしたケースを念頭に置いてみたい。もちろん、その際は教師個人に丸投げせず、学校全体で対策を考えるべきである。

教育行政学は資源の有効活用を考える学問分野でもある(論点としての効率性)。時間もまた学校の教育活動に投入される資源の1つである。ここで問題となるのは、時間割主義ともいえる発想が教育界では根強いことである。教師は1コマ45分(小学校)の授業をどう組み立てるかを考えることには慣れている。授業の導入の仕方、まとめ方は教員養成段階から学び続けている。ところが、1コマ45分という前提を前提として考えない、よりメタレベルでの議論となると想像がつかなくなるのではないかな。

時間割主義が強ければ強いほど、モジュール(帯)学習に対して批判や疑問がもたれやすくなる。しかし、NHKの語学講座をみると、5分、10分、15分、20分と時間のバリエーションがある。そういえば毎日の継続が語学の基本と昔から言わ

れていたような気がする。モジュール学習に目くらまを立てるよりは、その積極的導入を考えてみてはどうか。そもそも、英語教育初心者の小学校教師がいきなり45分授業をこなそうとするのは無理がある。無理を通さず(道理を引っ込めず)現有資源を前提とした授業づくりが必要である。授業準備で疲弊してしまっただけでは意味がない。

How から When と Where へ

どのような授業をどうやって行うかをあれこれ考えるよりも、まずは英語の授業をいつ、どこでやれるかを考えてみてはどうか。平日の教室での45分授業だけが授業ではないだろう。たとえば、イングリッシュ・キャンプのようなイベント要素を盛り込んだ授業は想像するだけでも楽しい(本誌2018年4月号「東京都英語村」の記事参照)。そのような予算がなければ、夏休みに学校に集まってイングリッシュ・キャンプ的な催し物をすればよいのではないかな。イマージョン教育とまでいなくても、「英語漬け」の経験は他の教科にも応用が利くと思う。

そもそも、45分授業に囚われなければ、授業時数を「捻出」することはまだまだ可能ではないかな。どんな小学校でもやっている給食や清掃の時間も、給食「指導」、清掃「指導」として位置づけられているのを逆手にとって、英語だけで給食を食べたり掃除をしたりすることで、少なくとも中学年向けの英語「活動」の時間として読み替えることができるのではないかな(そもそもアレルギーがこれだけ一般化している現在、昔ながらの清掃用具でいたずらに埃をまき散らす「清掃」指導を廃止して英語の授業に充ててもよいだろう)。

小学校教師に求められる英語教育負担を重く捉えるよりは「いなす」方がよい。担任1人、ALT1人の教授スタイルも固定せず、担任全員、ALT1人で1学年全体を教えてもいいのではないかな。

◆参考資料

中央教育審議会教育課程部会小学校部会(2016)「第4回配付資料4-4 外国語ワーキンググループ関係資料(1)」

文部科学省(2017)「小学校におけるカリキュラム・マネジメントの在り方に関する検討会議報告書」